

懐旧の想いを込めて

保科 弘治



《過疎棚田・秋から冬へ》 2016年 油彩 112×112cm

保科氏の作品には、対象を的確に捉えその背景をも浮かび上がらせる透徹した眼差しと郷土愛、そして優れた色彩感覚が冴えを見せる。既作の『浜の会話』(二〇一三年)においても、その地に生きる人々を眼差し、故郷の海を蘇らせたいという強い思いが、メッセージ性のある濃密な画面を実現していた。本作においては過疎地となつた棚田をモチーフに、秋から冬へと移りゆく景色を、懐旧の想いを込めて描き上げた優品である。蒼く積もる雪は冷涼な空気を伝え、長きにわたつてこの地に恵みをもたらしてきた田畠は陰影豊かな暗色でまとめられている。人の気配は感じられず、まさに山耕う時から山眠る時へと季節の経過を感じさせる。棚田とは、山間など傾斜がきつくなれば作付けが放棄されることが増えていた。過疎地少ない山間部や海岸部において貴重な食糧の供給源であったが、耕作効率が悪いことから、近年では作付けが放棄されることが増えている。過疎地においては尚更、人手不足でこの景観を維持していくことが難しいだろう。作者によれば「この棚田に農の原点を見る思い。若い頃、家業を手伝い人手をかけて耕した田畠。収穫を終え冬に向かう土のぬくもりを感じて描いた。」という。どこか懐かしく心安らぐ情景である一方で、作者の失われゆく風景への哀惜の念も感じられる。

文／嶋田 華子

Hoshina Koji

1935年山形県生まれ。山形大学卒。大学で真下慶治、東光会で松田茂等の指導を受ける。県展賞・奨励賞、東光会展美堂賞等。山形県、山形大学等作品買上げ。個展、グループ「氣」展。現在、東光会会員、県展委嘱、寒河江市美術館運営委員、東北芸術文化学会監査。